埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

The Story of Futoko(School Non-Attendance)/School Refusal : Re-examining the Discursive Union Futoko(School Non-Attendance) with Social Withdrawal

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 布村, 育子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/984

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

不登校経験の語られ方
― 不登校と引きこもりの接続を検討する ―

The Story of Futoko(School Non-Attendance)/School Refusal
― Re-examining the Discursive Union Futoko(School Non-Attendance) with Social Withdrawal ―

布　村　育　子
NUNOMURA, Ikuko

1：目的

これまでの研究の蓄積により、不登校現象は、ある種の「紋切り型」の語られ方を持つに至っている。瀬戸の以下の記述は、その「紋切り型」の語られ方を端的に指摘している。

「不登校問題について語ろうとするとき、私は、ある種の紋切り型の語り方に誘われてしまう自分に気がつく。たとえばこうである。不登校問題は、その初期には、児童生徒の『怠け』問題としてみなされてきたが、やがて『病気』として医療の対象として取り上げられるようになる一方で、不登校の子どもをもつ親たちから（不登校は）『病気ではない』とする異議申し立てが登場するところから、不登校をめぐる認識の二つの立場が明確になっていった。その間、教育行政機関は、不登校問題を『生徒指導上の諸問題』の一つとして位置づけ、毎年、不登校児童生徒数の報告をおこなってきており、その数の増加は、常にマスメディアによって、センセーショナルに報じられてきた。現在は、不登校を含む『学校不適応』対策として、たとえば『スクールカウンセラー制度』の導入・拡充に期待が寄せられている。かくして、不登校問題は、現代日本の教育問題としての市民権を得るに至ったのである、云々と。」（瀬戸、2001、45頁）

このような語られ方は、教育社会学分野にとどまらず、現在では不登校問題に関わる人々のほぼ共通の認識と理解して差し支えあるまい[(1)]。

では、この不登校現象の「語られ方」の次には、果たしていかなる「語られ方」が生まれ流布されていくのだろうか。上記瀬戸論文では、学校以外の新しい社会化の様態を具体例として挙げ、それを新しい「語られ方」として提示している。なるほど、不登校関連の文献は、1990年以降、この種の「語られ方」を軸に紡がれているといってよいだろう[(2)]。従って、瀬戸の指摘に異論はない。ただし、筆者の見解を付け加えるならば、学校以外の新しい社会化の様態が語られるならば、同時に、学校以外でも社会化できなかった者たちの物語も生まれているように思われる。そして、その物語とは、「学校に行けなくても許せる。だが社会には出て行かなければ一人前に

キーワード：不登校、登校拒否、引きこもり
Key words ：Futoko (School Non-Attendance), School Refusal, Social Withdrawal

なれない」と言ったような、強迫的な価値観によって支えられているように思われる。本論は筆者のこの「印象」を論理的に言語化すべく、①、現在、不登校現象はどのように語られているのか、②、①で導き出された「語られ方」が不登校問題に作用する影響とは何か、この二点を明らかにする。

２：不登校経験者の「成長物語」

では、まずは不登校現象が今、どのような語られ方をされているのか、これを確認したい。人が過去の経験を語る際に、物語化が行われることは避けられない。不登校経験者の語り方も、例外ではない。例えば、以下のような記述である。

不登校を通して得たことは、一人ひとりが大切な命を持ったかけがえのない存在であると再認識できたこと。どんなにまわりの人々が、常識を基準にして自分を否定しようとも、自分の人生という船の舵は、自分が握る。一見マイナスに思える出来事でも、そっくりそのまま、宝に変えられる生き方があるという学びに出会えたことです（『笑う不登校』67頁）。

子どもたちの不登校から、私は、この世の中の制度でこうであらねばならぬ、ということはないのだろうと思い始めている。他人の命を奪うことは絶対いけないことだけれど、それ以外、多少迷惑をかけあうのはお互い様だろう。自分がいま動けない立場の時は、誰かの手を借りたらいいし、動ける状態になれたら、誰かを手伝っていけばいい。世の中ってそんなふうに今まで回ってきたのだろうし、これからも回っていくのではないだろうか。「ありがとう」「うんまたね」それで充分な社会だったらいいだろうな（前掲　117頁）。

学校に行かないことで、学力的なことを心配したことも確かにあります。ただ、由希子と話をしていると、着実に成長していること、澄んだ心と目でものごとを見て理解し、そして感じとっていることがよくわかります。だから、由希子の姿をじっと見ていられるのかもしれません。そして、私は「今」を大切に生きていくことを学びました（前掲　130頁）。

娘がこれから何をし、どのような生き方を選び取っていくのか、はわからない。けれどどのような道筋の中にいても、「保障された将来」などということはありえない。学校に行き続けてきた息子にとっても、それはまったく同じことだ。未来への不安を生きるのは、しかし、彼ら自身の仕事である。親としてできるのは、ただ、いつか来る巣立ちの時まで、今ここにある居場所を守ることだろう。娘の傍らで過ごして、私は多くのことを考え、学んだけれども、それはまた私自身に属することである（前掲　180頁）。

それにしても、「我が青春に悔いあり」の最たるものは「人との出会いを大切にしてこなかった」ということなんですが、それって、“偏見・差別感”“世間体・見栄”なんてのに振り回されてきたからだと思うんです。子どもたちにゆっくりお付き合いしてもらっているおかげで、そんなもんはどんどん捨てたほうがいい、そうすれば風通しも見通しもよいウキウキするような場所に立てる、ということに気がつきました、やっと。今の日本では子どもが学校に行かないのを喜んでいるような人は変わっていると見られますが、「奇人

変人」とか「非常識」っていうのは、実は私のためにこの世に存在する言葉だったんじゃ…なぁんだ、もっと早くきがつけばよかったわい、と悔やんでいます。で、せっかくだから、めいっぱいスチャラカな人生を歩いてみたいなぁ、と思案中です（しかしスチャラカ道は遠く険しいのであります。ジャーン！）（前掲　186頁）。

上記の記述を単純化すれば、これらの語り方からは、【不登校→各種の学び→親子の成長】といった物語が即座に読みとれる。しかし、筆者はこうした語り方の帰結に全面的には肯定できない。なぜならば、まず、このようなタイプの記述の多くは、不登校経験者本人の成長が描かれているというよりは、むしろ不登校経験者の親の成長として語られる傾向がある。すなわち、「不登校経験は、誰の経験なのか」、「親の成長＝不登校経験者の成長と言えるのか」といった疑問が生まれてくるからだ。次に、これらの記述は、「不登校がもたらした学び」を記述するのだが、果たして、これらの学びは、不登校を経験しなければ（例えば学校に子どもが行っていた場合には）得られない学びであるのか、といった疑問が生まれてくるからだ。しかしながら、それら疑問の検討は本論の主たる目的ではないので、ここでは控えておく。本論が問題にしたいのは、不登校経験者の次のような記述である。

学校の子というのは、学校のスケジュールや決まりや考え方に自分を合わせて、自分のこころの声を聞かないで生きる子のことである。

学校に行かないでなにやってるんだろうと思われているんじゃないかとか、つい人の評価が気になって、自由な自分になれずにいた。そんな時は子どもたちに何か人に褒められるようなことをやらせたくなって、また親子関係がぎくしゃくした。でも、習うより慣れろで、子どもたちとともに生活するにつれ、だんだん自分流が出てきて、気持ちも楽になってきた。今は、私も自分のやりたいことがわかるようになった（『笑う不登校』21頁）。

学校をやめたことで、自分の人生は自分で選ぶ権利があること、責任の重さより先に権利があるということを知ることができた。そして、すごく大きな時間を手に入れたわけです。自分の使いたいように自分の時間を使える。その時間で、私は、いろんな大人のところに遊びに行きました。花屋さん、魚屋さん、本屋さん……お店をやっているところには、常に大人がいて、何かしら相手にしてくれる。そうすると、それぞれの人生が見えてきて、おもしろかったですね。子どもにも気持ちがあるように、大人にもいろんな気持ちがあるということを知った。それは、学校では知り得なかったことだと思います。学校では、先生は役割を生きないといけない。学校の先生はすごく忙しいですものね。先生たちは子どもたち以上に学校でつらいかもしれない。だけど、それは、子どもたちにとっては残念なことだと思います（『この人が語る「不登校」』30頁）。

学校に行っていないことによって、学校に行かない生き方も目に入ってきますよね。学校の世界しか知らない人は、学校のことしか頭にない。学校に行かない人は、学校の外のことが視野に入りますよね。だから、そういうふうに思って、本人のやりたいことを素直

にできたらいいと思います（前掲　62頁）。

上記の記述を単純化すれば、これらの語り方は、【不登校→各種の学び→不登校経験のない（学校に行き続けている）者の否定】といった物語として語られていることが読みとれる。つまり、先の例では、不登校という経験を通して、親と子が成長したという時点で完結している物語であるが、こちらの語り方は、不登校経験がもたらした成長を肯定するあまり、学校・学校に行っている子ども・学校教育に携わる人々が否定されている傾向がうかがえる。なかには、不登校経験者と登校者を同列に布置し、不登校を経験した者の方がむしろ人間的に優れているとでもいいたげな記述になっているのである。むろん、不登校が問題化されるにいたった経緯を考えるならば、これまで、学校的価値観の浸透した日本社会で否定され続けてきた不登校経験者たちが、自らのアイデンティティーを保つためにもそのような記述に陥らざるを得ない心情は理解できる。だが、客観的に考えるのならば、こうした記述は不登校経験者のルサンチマンとも読み変えることができよう。つまり、不登校をする／しないを、肯定／否定、善／悪、優／劣といった二分法で捉える限り、不登校経験者が自ら否定している学校的価値観の枠組みからは逃れられていないように思われる。

樋田もまた、不登校経験者の「語られ方」については、疑問を投げかけている。

「第一に、筆者が話をしたり、文字を読んだ限りでは、このタイプの言説をいう人の中には、『克服した』という過去へのこだわりがあり、『いまここにいるその人』というよりも『かつて克服してきたその人』が感じられてしまうことがあるからである。不登校へのこだわり抜きにその人と関われないと感じられてしまうのである。第二に、『不登校の克服』で『一段と伸びて行く』というこの言説の因果関係が、あなたも『克服できる』はずだという強制や『一段と伸びなければいけない』という抑圧へと変化しうるということである。第三に、『克服する』という表現は、個人と社会との関わり方という観点からは、個人のほうが『変化』し、集団や組織のあり方は問い直されることなしに『よかったね』で済まされる危険を感じる。第四に、この言説は病んでいる学校に対して適応してしまい不登校にならなかった子や、『運良くなったとしても（？）克服できないでいる子』に対して、『不登校刺激』や『克服刺激』を与えるものである。」（樋田　1999（1997）202頁）

この興味深い指摘のうち、とくに、第二点、第四点に注目したい。筆者が本論で注目したいのは、まさにこの点だからである。つまり、不登校経験を語るという行為は、親と子の成長を物語るだけで完結するのではない。またその語り方は、先に指摘したように、学校に行き続ける者たちをひとくくりにして否定するだけでも完結しない。それだけではなく、不登校経験をしても「成長」「克服」を感じられなかった者たちに対して、「成長しなければ」「克服しなければ」と言ったような強迫的な感情を呼び起こす物語になりかねないのだ。

３：小説『インストール』の「登校拒否」

前章で筆者は、不登校経験を述べた物語が、不登校経験をしても「成長」「克服」できなかった者たちに対して、「成長しなければ」「克服しなければ」と言ったような強迫的な感情を呼び起こす物語になりかねないと述べた。こ

のことについて、さらに説明を加えたい。

2001年の文藝賞受賞作、綿矢りさの『インストール』（綿矢　2001）は、筆者の説明のための好材料である。簡単にストーリーを紹介しよう。17歳の主人公朝子は、ある日「登校拒否」[(3)]をすることに決める。友人から、「まあもし疲れているんなら、１回学校休んで休養とったら。あんた今まで無遅刻無欠席だから知らないと思うけど、人が働いている時に休むと、皆が休んでいる時に一緒に休むのより二倍充実した一日が送れるよ。なんとなく焦るから自由時間の密度が濃くなるんだ」と言われ、その話が「流れるように進んで」「疲れている私は受験戦争から脱落することとなった」のだ。

朝子は「登校拒否」の初日に、自室にあるモノ一切を粗大ゴミとして捨てに行く。そしてゴミ捨て場で知り合った小学生と一緒に、インターネット上でアルバイトをしながら一日を過ごすようになる。朝子の日々の様子を、働きに出ている母親は知らない。したがって、前章で紹介したような親子の葛藤、その後の成長といった展開を軸にした物語は生まれない。やがて登校拒否が母親の知るところとなったその日、やっと朝子は以下のように語る。「心配してよ、という言葉を言いかけて飲み込んだ。雰囲気に流されてはいけない。私は母にかまってほしいわけではない。なぜだか怒りが湧いてきて私は母を挑発した。」挑発に母は泣き出す。泣き出した母を見て朝子は逃げ出す。母親の「成長」の機会は、ここでももぎとられていく。

『インストール』は、前章で筆者が指摘した、【不登校→各種の学び→親子の成長】といった軸で語られてはいない。そもそも、語る主体も親ではなく、本人である。従ってこの物語はこれまで語られてきたような不登校経験を通した親子の「成長物語」とは言えない。この物語は不登校を挫折体験と捉えていない点でまったく新しい展開を示している。だがこの物語の展開は、平成四年に文部省（現文部科学省）が「不登校は誰にでも起こり得る」と指摘し、不登校を問題視する視線こそを問題視した過程を考えるならば、こうした不登校をめぐる社会的雰囲気のもとに育った作者が、主人公の「登校拒否」を動機なき「登校拒否」として設定するのは当然の結果であるのかもしれない。したがって、むしろ注目すべきは次のような朝子の考え方であろう。

彼女はコミュニケーションを苦手とする登場人物「青木夫人」を見て、次のように考える。「高倉健のプラスの不器用さではなく、この青木さんのような、相手の人間を思わずのけぞらせてしまう程の異様な一途さをぶっつけてくるマイナスの不器用さを持った人は、実際迷惑だ。怖い。よくクラスのみんなは、自分を可愛く見せるためにわざわざ不器用なふりをしてドジッ子を装う娘達をぶりっこなどと呼んで嫌うが、この本物の不器用よりはそのぶりっこ達の作られた不器用さの方が余程マシだと思う。媚の武器としての不器用は軽い笑いを誘う可愛いものだけれど、本当の不器用は、愛嬌がなく、みじめに泥臭く、見ている方の人間をぎゅっと真面目にさせるから。」

朝子は自分の中にも同じ「不器用さ」があることは認めている。だが、その「不器用さ」に気づいている自分と、気づかない人間との間に、「気づいた」事実をもって、距離をおこうとする。

物語の最後には、朝子は次のように語り、学校に戻ろうと決意する。

「やっぱり不器用は罪なのだ。同情という言葉で彼らに甘えて、安心していてはいけないと思った。」

朝子は、登校拒否をする、しないということにさしたる区別をおかない。かわりに、自分の不器用さに気づいているか、気づいていないか、そこに重要な価値基準をおく。つまり、そもそも、同じタイプの人間であるにもかかわらず、その性格を「克服」し、社会適応できる人間と、そうでない人間とを明確に分け、自分が前者であることに意味を見出している。

この『インストール』の物語を単純化して、先のように並べてみる。すると、【不登校→各種の学び→コミュニケーションのできないものの否定】といった構図が読みとれる。この【学び】とは、「不器用は罪」といった社会的スキルに気づいたことを指し、【コミュニケーションのできないものの否定】とは、成人してもなお、「不器用」なままの「青木夫人」の否定を指している。つまり、樋田が述べているように、不登校経験者自身が、自らの経験を「克服」した後に、同じ経験をしてもその経験を「克服」できない者たちを否定する物語がこの小説の中に表れているのだ。

1980年代以降、「不登校」とは、学校から離脱することによって、その先にある学校化された社会をも相対化する力をもつと見なされてきた[4]。「不登校」を語る者たちも、個人の中に原因を追求するよりは、むしろ社会や学校のシステムの中に「不登校」を「させる」原因を見出してきた。だが『インストール』の朝子には社会を相対化する力を見ることはできない。かわりに、学校化された社会の価値観が、朝子の内側にも存在することを教えてくれる。「マイナスの不器用さ」・「本当の不器用さ」を持つものは否定されるべき人間であり、「マイナスの不器用さ」・「本当の不器用さ」を隠し（あるいは「克服」し）「高倉健のようなプラスの不器用さ」・「媚の武器としての不器用さ」を持つ者が社会に生きるにふさわしい人間であるという論理である。

もし、「不登校」が、今後この小説のように、いわば社会的強者と弱者のあり方を含んで語られるのであれば、1950年代から様々に語られ、ついには学校を相対化する機能を持ちえた「不登校」はその役目を終え、2000年代の次なる「語られ方」の時代を迎えたと言ってよい。この新しい物語の主人公は、学校での挫折経験がない変わりに、学校を否定する必要などない。つまり、自分の立場を肯定するために、学校に行く者にルサンチマンを向ける「弱者」ではない。『インストール』の朝子がそうであるように、学校に行かないことによって、いち早く「世の中の掟」を知り[5]、社会で生きるために必要なスキルに「気づき」、それに気づけない者を、「弱者」であると否定できる「強者」である。

４：不登校問題と引きこもり問題の接続

前章では、小説『インストール』を取り上げ、そのストーリー展開に見られる不登校現象の新しい「語られ方」を見てきた。本章では、こうした物語が、小説の世界だけではなく、実は現実社会にも生まれている点に注目したい。その具体的事例として、1990年代後半に問題化した「社会的引きこもり」を考えてみる。「社会的引きこもり」とは、「20代後半までに問題化し、６ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害が第一の原因とは考えにくいもの」と定義される[6]。

現在、この「引きこもり」が、客観的な裏づけが行われないままに、「不登校」とセットにして語られている傾向があるように思われる。例えば、「引きこもり」という名称を広く流布した斎藤環はその著書の中で、「一面的である」とは断りつつも、「外来にあらわれるひきこもり青年の多くが、不登校経験者である」と断定している（斎藤　1998　311頁）。

では、「引きこもり」と「不登校」をセットにして語られた場合、どのような結果が生まれるのだろうか。筆者は、これまで親子の成長物語として語られてきた「不登校物語」に二つの結末が生まれている点を指摘したい。ひとつは、ある一定の期間「不登校」であったとしても、その状態を「克服」し、やがては社会（あるいは学校）に復帰するという結末。これは、『インストール』の朝子の物語である。もうひとつは、「不登校」の状態を引き継いだまま（つまり、その状態を「克服」しないまま）、社会・学校でのコミュニケーションから撤退した「引きこもり」の状態に移行するという結末である。さらに後者の結末には、「不登校」が問題化された当初のような、個人（あるいは家族）の異常さ・病的さを強調する言葉が用意されている[7]。つまりこのふたつの結末から受ける印象を、『インストール』の朝子の言葉を借りて表現するのならば、不登校経験を「克服」し、社会や学校に復帰する者とは、たとえ「不器用さ」を持っていたとしても、その「不器用さ」を「プラスの不器用さ」・「武器としての不器用さ」に変えることができる、社会に生きるにふさわし人間像である。そして、社会に復帰できず「引きこもる」の者とは、朝子の否定する「青木夫人」のように、「マイナスの不器用さ」・「本物の不器用さ」を、形を変えずに持ち続ける、社会からは否定されるべき人間像である[8]。

しかし、ここで確認しておきたいのは、そもそも、「引きこもり」とは、社会問題とされなければならないほどに、注目すべき現象であったのだろうかという疑問である。まず、この点を検証してみたい。なぜならば、多くの「社会問題」がそうであるように、一部の専門家とマスメディアが結託して流布されたブームとしての「問題」である可能性が考えられるからだ[9]。

まず、「引きこもり」という現象を社会的に認知させたのは、富田富士也であると言われている[10]。彼はその著書において、「私は十年前から著書やマスコミを通じて引きこもる子どもや家族の声を伝えようと努力してきたが、力不足の身では『怠け者のぜいたく病』ぐらいにしか言われなかった。そして不登校やいじめの渦中の訴えには大きな関心が各方面から寄せられたが、『20歳を過ぎても引きこもる』不登校その後の子どもや『学校はでたけれどブラブラしている』若者の現実に光はなかなかあててもらえなかった。」と、「不登校」と「引きこもり」の関連性について述べている（富田、2001　3頁）。

その後2000年以降に連続して起きた青少年犯罪の加害者が「引きこもり」であったと報道されてからは、各種マスメディアがセンセーショナルにこの現象をとりあげ[11]、「引きこもり」は問題化されたと捉えてよいだろう。その問題化の過程に置いては、斎藤環の一連の著書が大きな役割を果たしている。先にも指摘したように、彼は「引きこもり」を取り上げた最初の著書『社会的ひきこもり』から、一貫して「不登校」と「引きこもり」を接続させて語っている。つまり、彼の著書

を読む限り、【不登校→引きこもり】といった、運命論的な物語を想起せずにはいられなくなる。また、この物語は、青少年犯罪の報道とセットで語られるため、「引きこもり」が大変危険な状態であり、引きこもる人生が、「人として生まれた意味を果たしてない」とでもいったような、道徳的な感情を呼び起こさずにいられなくなる。とくに、平成四年以降、文部科学省の「不登校は誰にでも起こりうる」という見解を素直に受けとり、不登校に寛容なまなざしを注いでいた者たちは、こうした一連の「引きこもり」問題を前に不安にならざるをえまい。「学校に行けないことは許せる。だが、社会からも撤退する状態を許すことはできない」といった感情が、今の「不登校」をめぐる大方の人々の、正直な反応となっているのではないだろうか。先に取り上げた『インストール』の朝子の言葉を借りるならば、その反応とは、「やっぱり引きこもりは罪なのだ。同情という言葉で彼ら（不登校する者）に甘えて安心してはいけない。」とでも言えるだろうか。つまり、「不登校」とセットにされた「引きこもり」の問題化とは、「不登校」を受容する社会的コンセンサスを覆し、否定的な反応を醸成する機能を持っていると言わざるをえまい。

では、不登校を「克服」できなければ引きこもりになる、という【不登校→引きこもり】物語に妥当性はあるのだろうか。これを客観的に考えてみたい。

『不登校－その後　不登校経験者が語る真理と行動の奇跡』（森田、2003）は、平成五年に不登校であった中学生の、その後の状態を調査した報告書である。「中学卒業後のキャリアの推移パターン」**（図１）**においては、現在20歳である調査者の約８割がなんらかの仕事をし、通学をしている。残りの２割の者についても、その者たちが「引きこもり」であると言った診断がなされているわけではない（前掲　38頁）。つまり、この追跡調査の結果

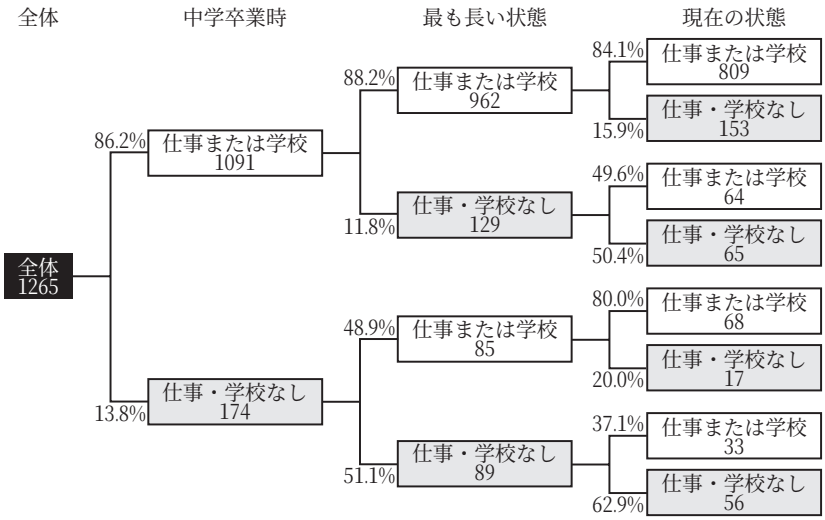

図１　中学卒業後のキャリアの推移のパターン

（出典）　森田洋司 編『不登校―その後　不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』，2003，38頁

を見る限り、「引きこもり」を「不登校」に接続させて語ることは、かなり恣意的であると言わざるをえまい。

そもそも、「引きこもり」とは、現在どれほどの割合で出現しているのかも、検討が必要である。カウンセラーや精神科医が、自らの診断を基に記述した「引きこもり」の数は、相互に相当の差があり、信憑性に乏しい[12]。したがってここでは、各福祉機関に訪れた相談者の数を調査した研究結果を参照する[13]。『社会的ひきこもりへの援助　概念・実態・対応についての実証的研究』（倉本編、2002）がそれである。分析者のひとりは、以下のように説明をする。

「相談率を保健所への受療率で割った値が地域のひきこもりの実数となる。受療率をどのくらいに見込むかによって異なるが、本調査によると、精神病でないひきこもりは少なくとも人口１万人に一人は存在すると推測される。受療率を0.1にとれば、少なくとも1000人に１人は存在することになる。」（前掲　63頁）

しかし、この説明は大変恣意的である。まず、なぜ受療率が0.1になるのかが説明されていない。「1000人に１人」と断定されても、その数字をにわかに信じられるコンセンサスを精神科医ではない一般市民は理解できない。仮に受療率を考えない場合、相談率＝ひきこもりの数と考えるならば、１万人にひとりという推測が成り立つのだが、この結果をもって、「引きこもり」を社会問題として考えねばならぬ客観的な数字であるとは言えまい。この数が多いか否かを定めるのは、個人の感受性の問題にすぎないからだ。また、「引きこもり」が近年になって増大したようなイメージがあるが、過去との比較統計がない限り、そのようなイメージは推測の域をでまい。そもそも、社会学的な逸脱研究を引証すれば、１万人にひとりという「引きこもり」とは、ある社会における「正常」な数字であるとも言える[14]。

このように見てくると、「不登校」と「引きこもり」を、診断者の印象のみで、簡単に接続させて語る方法は、かなり恣意的であるといわざるをえまい。しかしながら、「不登校を克服しなければ、引きこもりとなってしまう」という強迫的なイメージのみは、その統計結果を超えて、ひろく行き渡っている[15]。おそらく、いまだ日本社会に残存する「働いて一人前」「働かざるものは食うべからず」といった「世間の掟」なるものが、「引きこもり」を過剰に問題化したい人々を支えていると言えるだろう。

５：【不登校→引きこもり】物語の影響

前章では、「引きこもり」の問題化はかなり恣意的であり、「不登校」を「引きこもり」と接続させる妥当性にも疑問を呈した。また、【不登校→引きこもり】という語られ方には、過剰にマイナスのイメージが付与されている点を明らかにした。本章では、このマイナスイメージの中で語られる、【不登校→引きこもり】という物語が、不登校現象にどのような影響を与えているのかを明らかにしたい。

文部科学省「不登校問題に関する調査研究協力者会議」は、年々増えつづける不登校への対応を目指し、開かれた会議である。その報告書は、『今後の不登校への対応の在り方について』として頒布されている。協力者会議の委員のひとりが斎藤環であることからもわかるように、本報告書は、そもそも「不登

校」と「引きこもり」の接続に留意した会議であった。また、本報告書を読めば「不登校は許せる。だが、社会から撤退するのは防がなければならない」といった行政側の信念が随所に読みとれる内容となっている。例えば次のような記述が見られる。

「個々の不登校児童生徒に対しては、主体的に社会的自立や学校復帰に向けて歩み出せるよう、周囲の者が状況をよく見極めて、そのための環境づくりの支援をするなどの働きかけをする必要がある。児童生徒の自分の力で立ち直る力を信じることが重要であることは当然であるが、自分の力で立ち直るのを何も関わりを持つことなく、また児童生徒の状況を理解しようとすることもなく、あるいは必要としている支援を行おうとすることもなく、ただ待つだけでは、状況の改善にならないという認識が必要である。（略）なお、一部では、『平成４年報告』における『登校拒否（不登校）はどの子どもにも起こりうるもの』、『登校への促しは状況を悪化してしまうこともある』という趣旨に関して誤った理解をし、働きかけを一切しない場合や、必要な関わりを持つことまでも控えて時機を失してしまう場合があるということも指摘されており、そのような対応については、見直すことが必要である。」(『今後の不登校への対応の在り方について（報告）』，不登校問題に関する調査研究協力者会議　文部科学省ホームページより引用）

ここに述べられているのは、不登校児童・生徒は、必ず社会的自立を果たし、学校復帰しなければならないという「克服」刺激である。こうした語られ方は、日本の「世間の掟」が、政策レベルにおいても、いまだに不文律として残存している事実を教えてくれる。つまり、新しい不登校現象の「語られ方」とは、一見、不登校をめぐる語られ方としては新しい物語であっても、その内容とは、古くからある日本社会の、「働いて一人前」「働かざる者食うべからず」といった「世間の掟」同様の内容を持つ語られ方なのである。しかし、不登校が減少し、不登校児童・生徒が学校にもどり、「引きこもり」が世の中から消えること、それだけが、不登校現象の「解決」ではない。この「解決」をよしとする考え方は、そもそも、不登校児童・生徒がその存在すべてを使って否定してきた「学校化社会」の永続を意味する。【不登校→引きこもり】物語に過剰な反応を示せば示すほどに、その反応こそが、不登校を「学校に戻ること」「社会で自立すること」をもって解決としたい行政側の政策に大いに利用されてしまうのではないだろうか[16]。ただし、「世間の掟」を守る日本においては、こうした「学校化社会」の永続も、こうした「解決」が最善であるといった教育政策も、真っ向から批判されることはないのであろう。

６：結び

以上、本論では、１章で示した目的を果たすべく、①、現在不登校現象の語られ方が、【不登校→各種の学び→親子の成長】、【不登校→各種の学び→不登校経験のない（学校に行き続けている）者の否定】、【不登校→各種の学び→コミュニケーションのできないものの否定】といった語られ方で物語化されている点を明らかにした。また、【不登校→各種の学び→コミュニケーションのできないものの否定】といった語られ方が「引きこもり」の問題化とあいまって、【不登校→引きこもり】といった運命論的なイメージでも語られ

ている状況を指摘した。さらに、②、①で導き出された「語られ方」が、日本の「世間の掟」に後押しされて、「不登校」を「学校に戻ること」「社会で自立すること」をもって解決としたい行政側の、教育政策に利用されている可能性を指摘した。

私たちは、「不登校は誰にでも起こりうる」とする「寛容なまなざし」によって、おそらく、「不登校」をする必要などない人間をも含めて、「誰にでも」不登校の門戸を開いてきた。むろん「寛容なまなざし」自体を非難しているのでない。そうした視線を向けられず、「異常」「病的」といった「逸脱者」のレッテルを貼られたかつての不登校児童・生徒にとってみれば、この視線は、ある種の救いであったに違いないからだ。だがその一方で私たちは、「不登校」の内側に、社会的に受け入れられる者、社会からは否定される者といった、強者と弱者の選別をする、限りなく学校的価値観を内面化した「不登校経験者」を呼び寄せてしまったことも事実である。

「不登校が誰にでも起こりうる」という認識が一般化した社会であれば、「不登校」を問題化し、「語る」必要などない。平成四年に、文部省（現文部科学省）からその言葉が発せられた際に、筆者は「不登校」が問題化されない未来を考えた。しかし、事態はそのようにはならなかった。不登校現象は、不登校経験者が、自らのアイデンティティーを保つために、「克服」出来ない者を否定する物語、あるいは「引きこもり」と接続することによって、旧来の日本的「世間の掟」、「働いて一人前」「働かざる者食うべからず」と言った強迫的な「語られ方」を復活させた。この語られ方の登場によって、学校や社会の価値観を相対化してきた不登校物語は、完全にその幕を引かれてしまった。これから私たちは、かつての不登校現象が担っていた相対化の機能を、「新しい」不登校物語の弱者の結末＝「引きこもり」に、見出すのかもしれない。そしていつかは、不登校現象がそうであったように、「引きこもり」に「寛容なまなざし」を向け「引きこもりは誰にでも起こりうる」と語る時代が来るのかもしれない。だが、その日までに私たちは、膨大な数の「異常」で「病的」な「引きこもり」という名の「逸脱者」を作り出し、彼らを否定していくのだろう。

「不登校」「引きこもり」を、「克服」「成長」といった物語とは無関係に、肯定／否定、善／悪、優／劣、という二分法ではなく、ひとつの生き方として語る語り手は、そして、その様な物語を読みたいという読者は、現在の日本には、そしておそらくは未来においても、稀有な存在なのかもしれない[17]。

【注】

（1）不登校現象の語られ方については、朝倉（1995）、滝川（1998）、佐藤（1996）、を引証している。三者もまた、瀬戸と同様の指摘を行っている。

（2）例えば、奥地（1991）はフリースクールでの学びの可能性を、東京シューレでの実践報告という形で示している。

（3）現在の研究の蓄積においては、「登校拒否」という名称を用いずに「不登校」という名称を使用するのが妥当である。しかしながら、綿矢自身が小説内で「登校拒否」との名称を使用しているため、本論でも、綿矢の小説をめぐる論の中でのみ「登校拒否」を用いている。

（4）注釈（1）の朝倉、滝川、佐藤の指摘の他に、平成四年度に文部省より出された報告書『登校拒否（不登校）問題について』も、このような見解が示されている。

（５）「世の中の掟」や日本的「世間」についての見解は、佐藤（2004）、阿部（2001）を参考にしている。

（６）これは斎藤（1998）の定義である。厚生労働省（2001）もガイドラインの中で、「６ヵ月以上自宅にこもって学校や仕事に行かない（就いていない）状態が継続しており、分裂病などの精神病ではないと考えられるもの」という同様の定義を行っている。ただし、塩倉（1999）は20代、６ヵ月といった数字を使用することに疑問を示し「対人関係と社会的活動からの撤退が本人の意図を超えて長期間続いている状態であり、家族とのみ対人関係を保持している場合を含む」という定義を行っている。

（７）例えば2002年５月15日朝日新聞夕刊『窓』欄には、「引きこもり」の子どもをもつ家族の「困っている事があっても今は書けません」「ふろに入って欲しい。一緒に散歩して欲しい。食事は三回、普通の時間内で食べて欲しい」「探し探して十二年、いまだに適切な機関が見つかりません」「二十年以上経過。どうしてよいかわからない」という言葉が記されている。

（８）誤解を避けるために注釈をつけた。これは、綿矢のイメージから導かれる「像」である。筆者自身はコミュニケーションを得意とする人間が、社会に生きるにふさわしい人間であり、苦手とする人間が社会からは否定されるべき人間であるといったような考えは持っていない。むしろこうした二分法こそを、本論の中で否定している。

（９）古賀（1999）は「子ども問題」はセンセーショナルな報道や事件に惑わされ問題化されている傾向があることを、その著書で示している。「実際に起こる出来事の様相と構築される『問題』との間に否応なく生じる『ズレ』に目を凝らせば、私たちの日常生活には『問題』になりえなかった出来事が多々生じていて、それを整除する現実的な努力が絶えず行われてもいると言えるのだ」（209頁）

（10）工藤（2000（1997））の指摘を参照した。しかしながら筆者は、本論の中で後述するように、「引きこもり」の問題化については、斎藤環の「功績」が大きいと考えている。

（11）「引きこもり」と青少年犯罪の関連については、例えば1998年度版の『現代用語の基礎知識』「引きこもりの心性」でも述べられている。「このような人間関係が希薄になった引きこもり型の人物が、本物の人とつき合ったり、かかわろうとすると、うまくいかず、相手に拒絶されたり、嫌われたりする。そこで起こるのがストーキングの心理である。これから、ますますこの種のストーカーが増えていくに違いない。そして、このようなストーカー心理の延長に、幼女誘拐殺人とか、あるいは、恐るべき神戸の少年の凶悪な事件がある。」（小此木啓吾）

（12）例えば斎藤環は以下のように述べている。「近年、わが国には「社会的ひきこもり」ないし「ひきこもり」と呼ばれる状態にある青少年が、かなりの数で存在することが知られるようになってきました。一説には、数十万人ともいわれ、また年々その数が増える傾向にあるとも言われています。もちろんその実態は、調査がきわめて難しいためもあって、いまだに正確な把握はなされていません」（斎藤、1998　５頁）。だが、別のところでは「控えめにみてもひきこもりの人口は50万人はいるだろう」（平成12年９月１日朝日新聞「論壇」）と述べており、一貫性がない。2003年度版『現代用語の基礎知識』では「引きこもり」の項において、佐藤一子・鈴木眞理は「全国に約140万人いるとの推計もある。」と述べており、先の斎藤の見解とも矛盾する。

（13）同じく相談率で推測するしかない社会問題として、児童虐待があげられる。ただし岡邊（2002）は、虐待に関する社会のまなざしが強くなったために相談率が統計上増えたからくりを説明している。「引きこもり」の相談率も同様の解釈の余地がある。

（14）例えばデュルケムは、殺人者がある社会において一定の水準で出現する状態を「正常」と捉えている。この見解は社会学における犯罪研究の前提である。

（15）長田百合子、工藤定次は、「引きこもり」を社会に復帰させるための塾や施設（現在ＮＰＯ法人）

を運営している。その様子をテレビで放映するのだが、とくに長田の様子は視聴者に、「引きこもり」を「叱咤激励しなければならない存在である」かのように印象づけている。芹沢は、「引きこもり」の中学生が長田の様子を観て、「このババァを殺したい、父ちゃん、俺を名古屋に連れていってくれ」と父親に頼んだとのエピソードを載せている（芹沢、2002　185頁）。もちろん、この中学生の心情を一般化はできない。だが、長田の方法も、不登校研究の蓄積から考えて、あまりにも不登校児童・生徒の心情を無視している。したがって、一般化できるような方法とは言えない。だが、長田をテレビ番組に起用できるという事実は、「不登校」「引きこもり」に対する視聴者の、「精神を鍛えなおしたい」とでもいった感情に叶っているのであろう。

(16) 平成15年度学校基本調査報告書によれば、不登校児童・生徒数は２年連続で減少している。この結果については、文部科学省の指摘するように、スクール・カウンセラーの導入など、不登校児童・生徒への対応が整備された結果であると考えることもできよう。しかし、スクール・カウンセラーの導入に対しては批判がなされていることも指摘しておきたい(小沢、2002)。筆者の見解では、「不登校」が減少したのは、「引きこもり」の過剰な問題化によって、社会に「学校に戻ること」「不登校を減少させること」をよしとする総意が高まり、「不登校」を肯定的に捉える視点がセーブされたためと考えている。この点については、稿をあらためて考察したい。

(17) 吉本（2002）は、「『ひきこもり』の病的なものに近いと自分でも思って、反省したり直そうとしていた時期は、ひきこもるということを、『いい・悪い』の軸で考えている面がありました。でもいまは、善悪ということにはまったく関係がないと思っています。」（41頁－42頁）と述べている。渡部（2002）は「多数派のいうことが少数派のいうことより正しいわけでもない。人のことをとやかくいう必要もないし、親や目上の人にとやかくいわれる必要もない。どんな生き方も等価だと、ある日、思ったのです。よい悪いで、ものごとを決めたり、硬直した『あるべき自己像』をつくりあげるのではなく、自分の好きなように、生きたいように生きればいいんだと考えました」(62頁－63頁）と述べている。筆者は彼らのような「人生」の捉え方に今後の【不登校→引きこもり】物語は、新しい展開を見せるのではないかと考えている。しかし、現在のところ彼らのような意見は少数派であろう。

【引用・参考文献】

朝倉景樹　1995,『登校拒否のエスノグラフィー』, 彩流社

阿部謹也　1995,『「世間」とは何か』, 講談社現代新書

阿部謹也　2001,『学問と「世間」』, 岩波新書

岡邊　健　2002,「児童虐待・ＤＶの何が問われるべきか」『〈理想の家族〉はどこにあるのか？』, 教育開発研究所

奥地圭子　1989,『登校拒否は病気じゃない』, 教育資料出版会

奥地圭子　1991,『東京シューレ物語』, 教育資料出版会

小沢牧子　2002,『「心の専門家」はいらない』, 洋泉社ｙ新書

勝山　実　2001,『ひきこもりカレンダー』, 文春ネスコ

川口漕人　2001,『俺たち「ひきこもり」なのかな？みんな、どうなん？』, ビイング・ネット・プレス

工藤定次＋スタジオ・ポット　1997,『おーいひきこもりそろそろ外へ出てみようぜ』ポット出版

工藤定次・斎藤環　2001,『激論！ひきこもり』, ポット出版

倉本英彦編　2002,『社会的ひきこもりへの援助　概念・実態・対応についての実証的研究』, ほんの森出版

古賀正義　1999,「『子ども問題』を契機とした生徒・教師関係の再構築」『〈子ども問題〉からみた学校世界』, 教育出版

斎藤　環　1998,『社会的ひきこもり　終わらない

思春期』，PHP新書
斎藤　環　2002,『「ひきこもり」救出マニュアル』，PHP研究所
斎藤　環　2003,『ＯＫ？ひきこもりＯＫ！』，マガジンハウス
佐藤修作　1996,『登校拒否　いま、むかし、そしてこれから』，北大路書房
佐藤直樹　2004,『世間の目　なぜ渡る世間は鬼ばかりなのか』，光文社
塩倉　裕　2002,『引きこもる若者たち』，朝日文庫
杉本厚夫　2002,『自分のことは自分でしない　子どもの臨床社会学，ナカニシヤ出版
瀬戸知也　2001,「『不登校』ナラティヴのゆくえ」『教育社会学研究第68集』，東洋館出版社
芹沢俊介　2002,『引きこもるという情熱』，雲母書房
全国不登校新聞社編　2002,『この人が語る「不登校」』，講談社
滝川一廣　1998,「不登校はどう理解されてきたか」『岩波講座４現代の教育』，岩波書店
田中千穂子　2001,『ひきこもりの家族関係』，講談社＋α新書
田辺　裕　2000,『私がひきこもった理由』，ブックマン社
富田富士也　2001,『「引きこもり」からどうぬけだすか』講談社＋α新書
橋爪大三郎　2003,「引きこもりの社会学」『ひきこもり［知る語る考える］No.1』，ポット出版
樋田大二郎　1997,「不登校を克服することで一段と成長する　一登校の正当性をめぐる言論のたたかい」『教育言説をどう読むか　教育を語ることばのしくみとはたらき』，新曜社
村上龍・田口ランディ　2000,「引きこもりと狂気」，『群像』５月号
森田洋司　1991,『「不登校」現象の社会学』，学文社
森田洋司編　2003,『不登校－その後　不登校経験者が語る真理と行動の奇跡』，教育開発研究所
文部省　1992,『登校拒否（不登校）問題について』，学校不適応対策調査研究協力者会議報告
文部科学省　2003,『今後の不登校への対応の在り方について（報告）』，不登校問題に関する調査研究協力者会議
吉本隆明　2002,『ひきこもれ』，大和書房
渡部　真　2002,『ユースカルチャーの現在　日本の青少年を考えるための28章』，医学書院
綿矢りさ　2001,『インストール』，河出書房新社
笑う不登校編集委員会編　1999,『笑う不登校　こどもと楽しむそれぞれの日々』教育資料出版会